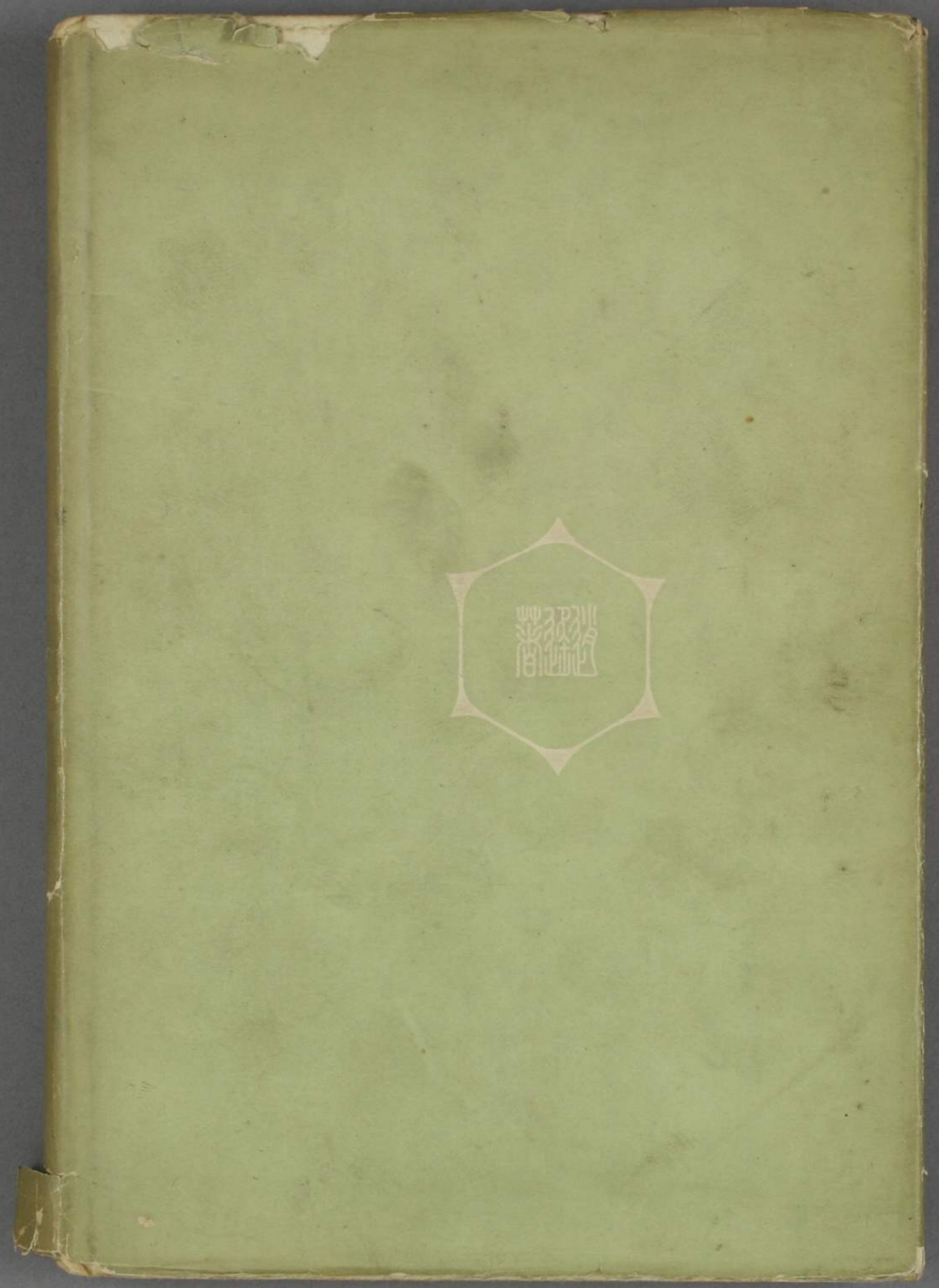
訂正四版

新補四書



訂正四版

新補四書

新補四國

新曲海島

竹内道雄

新曲浦島

坪内逍遥著

新曲浦島

坪内逍遥著

第三版序

第三版を公にするに臨みて、第一二版に對して寄せられたる大方の好意を感謝し、併せて本版に於ける訂正の博雅の批判に負ふ所少からざることを告白す。

本篇を作せし意は、一には「新振事劇」の結構を示し、二には曲と詞との關係を明かにせんとするに在りき、すなはち作意と脚色とは根幹にして曲の適用の如きは枝葉たるに過ぎず。されば萬一にも本曲に節附を試んとする人などあらば、本文に指定したる曲名、詣へ等には必しも拘泥せずして可なり。

明治卅八年二月

著者

通例、浦島の故郷を丹後國與謝郡筒川とす、然るに本曲は此の傳説を取らずして竹野郡とする説を取れり。こは全く吉田東伍君の『大日本地名辭書』の創見に負ふ所なり。但し予が本曲に此の説を借用せしは、其の史蹟としての價値を重んじてにはあらず、單に詩趣を幇くるに便なりしが爲のみ。

序

本曲は予が國劇刷新意見の大要を一箇の實例に體現して論旨を補はんと試みたるものに外ならず。譬へば、下圖、下畫の如し。予が理想の輪廓を示したるに過ぎざるものなり。本曲は今の劇場又は樂壇に上さんが爲に作したるものに非ず。只かくの如き方針の新曲にして、若し專門名家の改修を經、兼ねて將來に好作家を出だすことを得ば、以て新樂劇を興すに足るべきか否かを廣く大方に質さんと欲するのみ。東西の樂曲に精しき人々は、本曲を讀みて、或は甚しき無謀唐

突の企となすべく、或は嘲りて盲者蛇に怕れざるの類と爲すべし。單に詞章としてのみ之れを讀まん人々は、或は所謂刷新の尙ほ甚だ緩漫なるが如きを感ずべく、或は緣語、掛言葉等の舊格が何故に尙ほ頻りに襲用せられたるかを怪むべし。共に予の分疏するを難んずる所、又分疏するを好まざる所なり。

予が國劇刷新意見は『新樂劇論』と題し、別に一小冊子として出版せり。參照せられなば幸甚し。

明治卅七年十月

著者

目次

序之幕　澄の江の浦
前曲……一
第一段……七
第二段……一三
第三段……二七
第四段……四三
中之幕　前海底　中海神殿　後海底
第一段……六三

第二段……六八
第三段……七八
第四段……八六

詰之幕

前　網野神社境内
後　澄の江の浦

前曲……九五
第一段……九六
第二段……一〇六
第三段……一一五
第四段……一三七

新潮島

序幕

澄の江の浦

前曲

幕あくと正面一ぱいに美麗なる織物の垂幕を垂れ、其の前に曲人樂人一同居並び居り直に曲になる。

ウタヒ

寄せ返る神代ながらの浪の音塵の世
遠き調かな。

大ザツマ

夫れ渤海の東幾億萬里に際涯も知らぬ壑あるを名づけて歸墟といふとかや。八紘九野の水盡し空に溢るゝ天の河流れの限り注げども無增無減と唐土の至人が寓言今こゝに見る目はるけき大海原。

一中

北を望めば渺々と水や空なる沖つ波
煙る碧の蒼茫と
霞むを見れば三つ五つ溶けて消えゆ

く片帆影。

長唄

それかあらぬか帆影にあらぬ沖の鷗
のむら〳〵ばつと

一中

立つ水煙り

長唄

寄せては返る

一中

浪がしら。其の八重潮のをちかたや
實にも不老の神人の棲むてふ三つの
島根かも。

長唄

さて西岸は名にし負ふ夕日が浦に秋
寂びて磯邊に寄するとゞろ浪。岩に
碎けて裂けて散る水の行くへの悠々
と
旦に洗ふ高麗の岸夕陽も其處に夜の
殿。

清元

錦繡の帳暮れ行く中空に誰が釣舟の
玻璃のともしび白々と
裾の紫色あせて又染めかはる空模様。

あれ何時の間に一つ星雲の眞袖の綻
び見せて

常磐津

斑曇り。變るは秋の空の癖ゑづ心な
き風雲や。

コトバ

オーイかわせだぜえ。オヽサやめろうよ。

蜑の小舟のとり〴〵に歸りを急ぐ櫓
拍子に
雨よ降れ〳〵。風なら吹くな。家の
主爺は舟子ぢや。

風が物いや言づてゝよものの風は諸國を吹廻る。

船歌絡るかりがねの聲も亂れて浦の門に岩波騷ぐ夕あらし。

大ザツマ

すさまじかりける風情なり。

唄切る〳〵と涙の音。曲人、樂人左右へ分れて入ると同時に奥にて遠く船歌。

カヒワケ

船頭かあいや音頭の瀬戸で一丈五尺の櫓が撓る。

これに松風の聲、涙の音を冠せて、垂幕を徐ろに捲上ぐる。

第一段

漁夫甲　同乙　同丙

舞臺上手へ寄せて段々に奥へ重なりあふやうに生へたる大小二三株の磯馴松、いづれも年老いて姿寂びたるが腹這ふやうに大枝を差出したる、その邊より下手へかけて一面の眞砂路。すつと下手波打際のこゝろ爰に漁船二隻半引揚げてあり。ほゞ中央、松に間近く、干網幾張か。下手、船の彼方波打際に大なる岩二つ三つ。すつと奥は上手より下手へ奥深く一面に大海原の遠見。

總て丹後の國竹野郡澄の江の浦。今の網野村近傍の海岸卽ち夕日浦の邊より西方に向つて日本海を見たる景色。

秋も稍末つ方の夕陽既に西の海に沒したれど、地平線に殘る夕照（正面奥上手寄り）微かに赤く八日ばかりの弓張月西南の空（奥下手）に懸りながら、穏かならぬ雲列忙げに走りて月影忽ち昏く又明く、松風の聲、涙の音共に氣色ばみたり。

垂幕を捲上ぐると同時に船歌は將に斷れんとす。

舞臺にては「えいや〳〵」と掛聲して、年輩の漁夫甲、乙、丙の三人、漁船を松の根がたへ引揚ぐる。前の船歌斷るゝと直に、同じく遠く奥の方にて、別の聲にて第二の船歌。

オヒワケ

別れの風だよあきらめしやんせ。帆影見るさへ氣にかゝる。

此の歌の切るゝまでに船を揚げ、漁具、船具を片附け、やがて干網を取下す。（此の間折々涙の音）。

甲白　はてさて、今日は、むざと去たことの。

乙白　去たが、あれ、見さしめ。いかう雲行が惡しうなつたわ。

丙白　此の樣な輕い魚籃を提げて戻るならば、また女どもが腹を立て、人を芥、藻屑のやうに言はう。

甲白　されば い。兎角沖には事なかれぢや。家内の浪風が騷ぐわ。

乙白　家内の浪風といへば、浦島の爺の一人子が氣が

鰯れたとは實か。

甲白　なか〳〵。　憑者が去たのでがなあらう。職は怠る、其處此處と漂泊き歩く。親たちが叱れば腹を立て、情強に爭ふ。只釣にばかり心を入れて、明けても釣、暮れても釣、いかな日も小舟に乘つて沖つ邊をぬらめかぬ折はない。此の中も打續けて七日餘り面見せもせぬ。

丙白　さて何を釣るぞいやい。

甲白　されば、何を釣るぞと問へども、斷に明さぬ。人

傳手に聞けば、銀の鱗に眞珠の眼球、尾鰭共に黄金色去たる腹紅の魚を得うずるとも、あるは人魚ちふものを釣るぞともいふ。剩へ斷に餌を用はぬ。何と稀有なことではないか。

乙白　ふつに餌を用はぬ。さて〳〵稀有なことぢや。

丙白　人魚を得うとする。さて〳〵稀有なことぢや。

乙白　すればこそよ。あの我強い尉が此の中は鮠のやうに痩せた。

甲白　男親は未しもぢや。女親が可憐しい。夜も寐

ぬげの面持して、昨宵も甚う更るまで、此邊に立迷うてゐたわさて。

丙白　や。噂をすれば影ぢや。あれ。あしこへ。其の姥がわせた。

此のうち網を片附け了る。

甲白　なに。わせた。面を合はするも笑止ぢや。

乙白　今の間に避すまいか。

甲白　なか〳〵。急いで避さしめ。急いで。

一同揃うて下手へ入る。

第二段

浦島の姥　同尉

殘る照全く消え、月も雲に掩ほれて昏くなる。涙の音、松の風一ふきり。下の曲よきほどに浦島が母、の姥出づる。六十以上、賤しからぬ人柄、やゝ有福なる農家の妻の服裝。人尋ね貌の思入。

曲（常磐津）

秋風に小萩の下枝亂れては脇目あぶなき露の玉。つらぬきとめん手緣さへ涙に曇る我がこゝろ闇になれとや顰む月。

曲に伴れて際立たぬ程の振ありて

姥白

我強い尉どの丶目を忍び、夜毎に行方をば尋ぬれども、そよとの音信もおりないは、氣がかりなことでおじやる。

此の時又松風の聲浪の音。第三の船歌前々のよりも遠く微かに哀れに

オヒケワ

親は程經りや不具な子なりや人でなしなりや尚更に。

此の歌のうちに浦島の父の尉出づる。七十近き老體卑しからぬ服裝、裕かなる農家の主翁杖はつけども腰附尚ほ鑊鑠なり。姥は此の歌の間それに障らぬやうに斷々的に左の獨白を言ひてあちこちと歩く。

姥白

生得……くわつとなり易い吾子でおりやるを……憑物が去た、憑者が去たと……人皆の言はしまする此頃……身を棄てうとも爲難まい。……さて〳〵氣がかりな……さて〳〵……

此のうち歌斷る丶。月雲間を洩出づる。尉は松蔭に樣子を窺ふ。姥は中央へ戻り

姥白

此の上は神力を賴むより他はおりない。何卒吾子を護らせられて下されい。何卒吾子を……

……

と四方を拜むこと。此のうち尉傍へ立寄り

尉白　姥どの。これの。姥どのてや。

と大きく呼ぶ。

姥白　や。

と見返り

白　尉どのか。

と面無げに踞て

白　面目もおりない。面目もおりない。

と袖にて面を掩ふ。尉徐かに船縁に腰を掛けて

尉白　あのやうな人非人は、子と思はぬによつて、和女も子を有つたとばし思はしますなと、繰返いて吩咐て置いたではないか。魂を入換ずば家内へは入れぬというた、其の舌の尙乾かぬに、こちから折れて出て何となるものでおじやるぞ。今にもあれ、あの横着者が戻り來て、此の體を見うならば、一段と親を蔑如にせう。實可愛いと思さば、子を有つたるをば忘れ、一先我等と共に歸らしめ。

姥白　なに。子を有つたるをば

曲白　忘れいとやなう。

と泣く。

曲（常磐津）　我が年波の寄るをさへ憂き世が掛く
る搾木をも子には忘るゝ折もあれ。

白　子を有つたるをば

曲白　忘れいとやなう。

と泣く。

曲　有り餘る子寶さへも取り〴〵の眞玉
と愛しむ親ごころ。まして老樹の一

つ果は

曲白　吹くな夜あらし。夢の間も

曲　忘らりよものか。夢の世に只是れの
みぞ現なる。

と際立たぬ程の振ありて

姥白　曲もござらぬわいなう。

と泣きおとす。

尉白　その甘やかしの毒が利いて、親を親臭いとも思
はぬげの彼の自儘者が跋扈つたわい。蔓物は

摘め、圃物は間引け、

曲白　皆行末を

曲（竹本）　思ひ子は別けて打てよの教へ草。

白　言葉が茂れば、身の耻が嵩むのみでおりやる。

と立上り

白　もはや何事も言はいで、思ひたえて歸らしめ。

此の時まで俯きゐたる姥遽かに貌をあげて

姥白　尉どの。

尉白　何でおじやるぞ。

姥白　打叩くが慈悲と言はしますが、逆上いて本性もなうおじやつてもか。矯過れば、鞭も折れうぞよ。

尉白　や。

姥白　鞭が利過ぐれば、悍馬は、火中、水中へも駈けうぞよ。

尉白　むゝ。

姥 曲（常磐津）
互ひの意地を張弓の返らぬ歎きある
ことを

白
覺悟しておじやるかいの。

尉白
はて、さばかりの覺悟せいでや。

姥白
實正か。

尉白
なか〳〵。

姥白
誓文か。

尉白
おんでもないこと。

姥白
いや〳〵。我強うなおつしやつそ。生の無い
器調度でもあることか。一時の我に代へて

曲白
棄てらるゝ子寶かいなう。

曲（常磐津）
鏡だに手馴しぬれば棄難ぬる。磨き
あぐもと劈割れて影歪もとも可しや
よし我がのにやあらぬ。曇ろとも手
持わろさに曇ろもの。さりとては情

あさがゞみ。

と此の間尉往かうとする。姥留めて徐かに絡み、泣き口説く模様の振ありて收了る。

姥白

せめて今一度、説諭いてくれさしませい。

尉白

此間船縁に倚りて默然たりし尉ぶつと思入あつて

又面見うとも思はなんだが、さまでにおしやるからは、

と海の方を見返り、西に傾ける夕月の影を指ざし

尉曲白

あの夕月の

曲(竹本)

ほのめく影の殘るうち歸らば爰に俟

ちうけて

姥曲(常磐津)

右も左も今一度

尉曲白

諭いて見る目に花咲くか。

姥曲白

只憂見るか。

尉曲白

假の世は

二人曲(竹本)

親子のえにし薄明り。

と姥は尉の袂に縋りて愁の振あり。と〻姥は海の方を見て

姥白　あれ、微見ゆる

曲白　彼の舟は。

尉曲白　どれ。

と奥を見て頷き

曲　歸り來るをば來松蔭に

此のうち姥は耐へかねて走り行かんとするを、尉留めて

尉曲　暫し憂き身を忍ばまし。

と此の曲一ばいに尉は姥を和めて松蔭へ誘ひ入る。

第三段

浦島　尉　姥

此の時、又風の音一陣して、雲走ること急に、月は將に落ちんとして昏くなり又明くなる。涙の音。下の曲のうち浦島奥より出づる。齡二十三四、眉目秀麗にして人品氣高く、服裝も賤しからぬながら、鬢髪亂

れ、顔色悲みを帶び、形容やゝ衰へたり。肩には釣竿、手には網を納れたる畚を携へ、怏々として出づ。

浦曲（ウタヒ）

黄金の炎身に浴びて黄金の炎身に浴びて鎔くる玉とならばや。

曲（一中）

視れども倏忽として見るに由なく聽けども惝怳として聞かん緣も涙枕幾夜か經つる釣小舟。うつゝなの我がこゝろ。

此の曲よきほどに、船の在る邊（中央正面）へ來り、さて更に下の曲に伴れて徐かなる振あり。

浦曲

幻影は何處へ消ぬる。釣綸の雫の玉に髣髴きし靈し幻影を見ざりせば斯ばかりに世を厭はじを。あら。彌醜ある現世や。

と歎き悶ゆる思入ありて肩にせる釣竿を取直し悵然に詠むることありて

浦白

只一すぢ殘つたる賴みの綸も

曲白

切れはてたり。

と憮然に釣竿を抛つ。

浦曲

身をも世をも救はん網も鈎も今は仇
なれ。鱗族に

と哀げなる思入。此の振のうちに、手に持てる春を
も地に抛つことあり。

曲

身は對へども無何有の鄕に心たゞよ
ふ捨小舟。あゝ。風荒かずもあれや
我が身は毀れ舟。

「風荒かずもあれ」より、狂ひ悶ゆる介。あちこち狂氣
のやうに歩くことありて

浦白

眞情の通ふをこそ近親と謂はめ。心千里と隔

ち、さらでも寄邊なさに惱める胸に、浪風立たす
るが親の情か。あら。無情の人ごころや。

と上手に向ひて立ちながら罵り且つ泣く。松蔭に
樣子を窺へる尉堪へかねて走り出んとするを、姥の
留むることあり。

浦白

廣き天が下に

と空を仰ぎ憤る思入。

浦白

只ひとりだに

曲白

我が心を

と歎く思入。

曲　知るべなき現世なれば花も憂し。鳥も厭はし。榮ゆるを友呼び交す見れば憂世を思ひの種ぞ。可厭やな。

と悶え歎く。此の時雲少しく切れて落ちかたの夕月俯ける浦島の脊を照らす。浦島は我が影の地に映れるに、ふと心づきたる思入。坐したるまゝ海の方を見返り、ぢつと思入ありて

曲白　只月のみは

曲　只月のみは虧くると言ふも影の所爲曇るも雲の科なれば慕しくぞある。

然りながら餘り微妙じき影見れば坐ろ又彼の幻影の思ひ出さるゝ苦しさよ。

此の曲のうちに又起ちて振あり。とゞ狂氣のやうになりて悶え伏す。月落ちかゝり、涙の音すさまじく、空模樣あらしだつ。

此の以前尉先きに姥も續いて松陰を出で、浦島の傍へ寄り

尉白　やい。こゝな。面あげい。

浦白　や。父御か。

曲白　母御前もか。

と起ち

浦曲(一中)

面を見れば我が心異しう轟き

と我れにもあらず逃げんとする。

尉曲(竹本)

やい。待つた。

さすが汝れの眼にも父よ母よと寫し

世の

浦曲(一中)

縁の綱手に繋がれて

と尉は浦島を引戻し、又引廻して意見模様の振になる。此の時月全く落ちて、海轟き、あらし烈しくなる。

やがて尉は腹立てたる思入、浦島を折檻せんとする。姥割つて入りて泣きながら止め

姥曲(常磐津)

網子に引かれて引かれて網子に碇沈

めの縄くるし。

と三人巴に絡みて

尉曲(竹本)

幾たび憂きを掛け縄の

浦曲(一中)

長き契りも

尉曲(竹本)

もつれて

姥曲(常磐津)

つれて

尉、姥曲(常磐津)

絶たまくをしき千筋縄。

と尉は怒り、姥は泣きて、浦島を意見する模様の振ありて收了る。あらしも少し静かになる。

尉白

やい。のめ〳〵と戻つたる其の面にも言分あれど、差當つて聞きたいは、今ぬかいた幻とやらは何ぢや。

曲(竹本)

それこそは親子の中に水さす曲者。

白

幻とは、そも何處の誰れぢや。

姥曲(常磐津)

とりなしは母がせう。

白

そと言はしませ。

尉白

ちやくと言へ。

姥白

何との。

尉白

何とぢや。

浦島五月蠅げに

浦白

あら。

曲白

何ともなや。

と尉と姥とを左右へ押退けて起上り

浦曲(一中)

幻は只幻ぞ。凡人の其の霊妙相えや

は見る。えやは見る霊妙相。

と惝怳として目に幻を追ふやうの思入にて、下手へ

怳惚として歩く。涙風また激しくなる。此のうち

尉耐へかねて

尉曲(竹本)

なに。凡人のえやは見る。ぬかいた

り其の頬桁を。

と尉浦島を引き戻し、胸づくしを取りなどする。姥

また割つて入りて

姥曲白

これ。

曲(常磐津)

現なの亂れ心ぞ。よしや

と浦島ふらくと蹌踉く。尉又打たんとする。姥

止むる。

尉曲

よし此の海野田と干るとても親とは

宣らじ。放し舟。

と、と〻浦島を突倒す。姥とりさへかれて

尉曲
は
浦曲
な
姥曲
れ
尉、姥曲(常磐津)
ばなれの
三人曲(常磐津)
是非もなや。

と宜しくありて姥泣伏すこと。あらし尚未だ歇まず。

尉白
やい。そこな。親子の縁を切つたからは、我が家の扉に

曲白
影でも射すな。

曲(竹本)
返らぬ昔し悔む日を軈ても思ひ知り
ぬべし。

白
姥どの、おじやれ。

と去りかぬる姥を促して強ひて去らんとする。姥耐へかねて

姥曲白
もし是れが

と浦島の方へ駈戻らんとする。　尉留めて

尉曲白

これ。

此の時浦島も偶と貌を上げて尉姥を見返る。　三人目を合せ、おの〳〵宜しく思入、科介。

尉曲(竹本)

此の世は夢の假りごろも。

姥曲(常磐津)

裾に千引の岩枕。

二人曲(竹本)

引戻さるゝ思ひなり。

と、尉は思切つて姥を引立てゝ入る。

第四段

浦島　少女(乙姫)

これより先き、尉の白の初より、あらし次第に衰へ、此の時全くしづまり、遠く沖の方に餘波の涙の音聞ゆる。第四の船歌前々のよりも更に遠く、更に哀れに聞え來る。

オヒワケ

親も知らねば妾や來しかたも行方をば

ら涙捨小舟。

悄然と俯きぬたる浦島、次第に此の歌に聞惚るゝ體にて、徐ろに頭をあげて思入あり。　歌切るゝと

浦白　神は荒忽として反らず、殘る形も

曲白　枯れはてゝ。

曲（一中）
往きぬる者は消ぬる泡。來らん者は
遊絲の暫し髣髴く水の影。
げに何者を父母に。何方往くらん。
何爲んと。
生死の海に長き夜を何時まで夢に漂
泊兒。あゝ。おぞましの人の子ら。

と此の曲よきほどに起上りて怳然として浪打際へ

進む。舞臺徐かに半ほど廻りて、漁船磯馴松など何時しか遠くなり、薄暗の中に朧々となる。舞臺一面に眞砂路のこゝろ。中央に大なる巖二つ三つ。奥は一帶に大海原の遠見。沖の方に涙の音遠く聞ゆる。浦島海に向ひ惚々と詠むる思入ありて

浦白　和には薄板に嬰兒眠り、あらしには蒼空の星も驚擾く。

曲
際涯も知らぬ蒼海は自然なる墓所。

白　人畜は言ふもおろか。河といふ河、山といふ山、流れての末

曲白　崩れての末

曲　見る物なべて汝が胸に融けてや解けん不斷の謎。

白　靈妙しき死の都よ。如何に。此の

曲白　一滴をも

曲　汝が懷中に。

と、ふらゝと海に歩み入らんとして、ふと心附きたる思入にて淋しげに打笑み

白　あら。おぞまし。我れ海邊に生ひたち、鱗族にも等しき身なるを、いかでかは

曲白　水中に

曲　死ぬことを得ん。何とせん。

と思ひ惑ふ思入。やがて

曲白　おゝ。

曲　思ひ出たり利き刄物。

と徐かに立上り上手に投出されたる春の裡より小

き双物を取出すことあり。

曲

尙ほ有繫に幻影の有るかと見えて目
に見えぬ坩堝に今ぞ返す魂。

と此の曲のうちに双物を携へて徐かに元の位置へ復り宜しく科介ありて、徐かに喉笛を掻切らんとする。此の途端、大巖の蔭より衣裳は稍、鄙びて賤女かとも見えながら、容顏は玉のやうなる一個の少女、齡は十七位なるが、忽然と走りいで、馳寄りて、双物をもてる浦島が手に縋り止む。髮は角髻のやうに束ね、質素なる飾櫛唯一つ挿し、其の髮毛の紊亂しくなれるを、長き袂と共に浦風に吹飜し、横さまに身を寄せて、浦島が貌を仰ぎ見たる。沈みし月が、萬里の清

波に浴して今圓かになりて、復新に澄昇りたるが如く、四下の闇の明るくなるほどなり。浦島駭きて

浦白

や。おことは。

少女は浦島の手を抑へながら

少白

喃。異しうはない者ぞや。沖の暴風に船覆りて、危かりしを助けられ、此の濱邊へは

曲白

着いたれども

曲(長唄)

浪蔭に月の面わの埋もれて唯烏婆玉

の夜の色。心細さの闇閉ぢて方向あ
やなき胸のうち。

と少女よきころに浦島の傍を離れて立上る。浦島は尚手に双物を持ちたるまゝ、さながら醉ひたる人の如く、恍惚として少女の面に見とれ、いつしか双物を取落し、目もて其の立舞ふ姿を追ひゆく。

浦曲（一中）

あら。うつゝなや。幻影の復も眼を
遮るか。

と、よきほどに立上りて少女に絡む。此の時少女が上に着たる衣裳一重飜然と脱落ちて、一段華麗なる着附となり、曲節もまた一變す。

少曲（長唄）

誰れを寄邊と爲んかた涙の

浦島恍惚として立舞ふ少女に立添ひつゝ

浦曲（一中）

夢を見るかや。うつゝかや。

少曲

涙の彼方の小島が崎に別れ程經て懷
かし戀し父も居りそろ。母そばの母
も荒磯に我れ松風の吹くにも胸の騷
ぐらん。

と浦島は夢を見る如き思入にて、うつらく〳〵と絡む。

とゞ

少白　案内してたべ、故郷へ。

浦白　なに。故郷へ

曲白　案内せよとや。

と浦島ほれぐと少女の貌を打まもり

浦曲（長唄）　君見れば厭ひ果てぬる我が生さへ鴛鴦の思ひ羽思ひぞ増る。翼交して

少曲（長唄）　交して翼番離れぬ其の中々も晴れて逢ふ瀬の涙川とて

浦曲　よしや浮寐を重ぬと儘よ。などか厭はん君ゆゑならば

二人曲　替へぬ契りの幾世をかけて離れがたなき夫婦鳥。

と美しき色合の振ありて收了る。

浦白　去て、指す方は何處ぞや。

少白　その指す方は

浦白　その指す方は

少白　海の底。

浦白　なに。

曲白　海の底とは。

と驚く。此の時少女端然となりて

少曲白　我れは實は人間に

と言ひさして徐ろに起上り

少曲（ウタヒ）　あらうなばらの底に住む海神の女さ

ふらふなり。

と緩かに舞うて廻る。

浦白　なに。海神の

曲白　女とや。

と彌ゝ驚く介。少女は過去を憶ぶげの思入ありて

少曲（長唄）　春和に詠涯無く琉璃澄みて八千尋透る朝ぼらけ。龍の宮居の軒端にも映る大空の影麗かに目も彩雲の漂へる見れば心の憧れそめて。人界を愛れば搖曳ぐ玉藻花秋立つ頃

よ海神の父の許も涙の上に
浮ぶや龜の姿して。

と此の物語の振のうち、少女の衣裳いつとなく脱落ちて、次の曲の切るゝ時分には全く爛熟たる白衣姿となる。衣裳は輕羅にて、ところ〴〵金絲、銀絲にて玉藻の縫模樣あり。紅き色さへも主として飾帶に用ひたり、其の他の色は只淡しきを聊か用ひたるのみ。頭髮に挿したる飾櫛此の時忽然と金光を放つ。加之、瑪瑙眞珠玳瑁のたぐひ、胸、手首の邊に輝き出で、丈なる黑髮は飜然として解けて亂れ、垂れて地を拂ひ、白玉を延べたる如き胸、腕の邊は、西洋の女神などのやうに輕羅透視り、白地又は赤地の金襴の飾帶めくもの幾片となく翩々と翻き、すべて白き魚に金銀の鱗、尾、鰭あるものかとも思はるゝ水中の

物らしき裝ひ、涼しく淨らかに麗しく神々しく、而も何となく潤ひ濕りたるやうの風情あり。

かくて少女は龜となりて、陸近く浮びて、空の景色、山川の有樣などを打詠むる模樣の振にかゝる。

少曲

折から西に金色の眞玉燃えたち見る
うちに玳瑁流れ銀融けて黃金に漬る
雲の袖。
裾むらさきに暮行くを神もゆらゝに
見惚るれば

と宜しく形容の振。此の曲の中程に浦島も立ちて時々枷になる。

浦曲（長唄）

眠れる龜を捕りぐ〜に罵り呼ばふ漁
夫の子ら。

と少女に絡み、次の曲に移るまでの間やゝ長き合の手に合せて龜の危難を救ふに擬へたる振あり。と

少曲

嬉しやな。まぬかれて
又立歸る八重の隈。千尋の恩いつの
世か

浦、少一しよに曲

忘れぬ（影を現にて見るぞ君に恙なく逢ふぞ）嬉しき。嬉し

さに神昏めく。うつゝなや。

浦曲

あら。現なや。これはそも

曲白

夢にあらじか。

少曲白

夢ならぬ

曲

契り結ばん。蓬萊邊へ來させたまへ
諸共に。

と二人纏綿して、喜び狂じて立舞ふこと宜しく

浦曲

幻は現となりぬ。君と我れ二人かも

将た一人かも。

と此の途端、浦島が着たる衣裳忽然として脱落ちて、少女の着たるものに同じき燦然たる白衣と變り、頭髪も忽然と解けて翻り、額上には細き金環に寶玉の飾り附いたるもの現れ、少女と共に、譬へば二羽の奇しき蝶鳥か若しくは翼ある靈しき魚などの如く、彼此相分ちがたきほどに形影髣髴として連繋りあうて舞ふ。此の以前舞臺は更に一段朦朧となりて、海上に異しき光あり、或は青く電の如く、或は白く月光の如し。

少曲

君と我れとは雄雌の波。雌波雄波と
分けては呼べど寄せて返して返して

寄せて此の世盡くとも分れじやはか。

浦曲

げにや我れさへ分けかねつもの。

少曲

いつか離れん。蓬萊邊へ

浦曲

いざ伴はせ。あら。樂し。

少曲

あら。あら。樂し。嬉しやな。

浦曲

あら。あら。嬉し。うつゝとも夢と
も分かず君ぞとも

我れとも分かぬ嬉しさの際涯知られぬ大海も二人が中の嬉しさを容れて溢れん。八重潮の溢れて空を涵すら溢れて空をや涵すらん。

と此の綢繆たる曲に伴れて、二人は蹁々躚々と縺れあひて段々奥深く舞ひ行く。それに伴れて舞臺も廻ること宜しく、よきほどに朦朧たる正面奥の方の海上へ髣髴として幻影の如く隱約として夢の如く、龍宮城外廓の遠景らしきもの現はるゝ。此の模樣よろしく垂幕おのづからの如く下る。後暫く洋々嘵々たる音樂(雅樂)に和して、いと靜かなる涙の音。

中止幕

第一段

前　海底
中　海神殿
後　海底

赤魚　鱸　鱚

雅樂に静なる涙の音を冠せて幕を開くる。一面の平舞臺大海原千尋の底の體。見る限り海水盈ちて洋々たるこゝろ。中央(迫上げに障る部面)を除くの他は、四方あちこち、遙かに奥のかたにも種々雑多の海樹海草蔓々翁々として風情面白く生ひ出で、葉も

枝も幹も根も蝟々と輕く輭かに靡き漂ひ流るゝ旗の如く漂ふ帶の如く、又は亂るゝ絲の如し。其の色は或は碧琉璃の如く、或は紅褐色の天鵞絨の如し。又花の如く實の如き物あり、其等は枝葉もろとも銀の如く白玉の如く、水晶の如く殆ど一々には名狀すべからず。又其處此處に形圓く滑かに凸凹をなして、海苔に掩はれては青み貝に附かれては輝ける黑き岩ども。さて此等の草樹の參差として生ひ茂れる間を潛りて千狀萬態の美しき鱗族洋々として、或は奥深く游ぎ入り、或は高く〳〵游ぎ浮び、始終(幕開いて閉づるまで初めは繁く、中、後は只折々ながら全幕を通して)かゆきかゝゆきす、怡も羽族が春林の樹間を飛び交ふが如し。すべて晶々蒼々として沈々漫々たり。

幕あくと、件の魚ども、浮きたる三絃樂に伴れて上手

より、下手より、奥より、群りて游ぎ出づ。すぐ曲になり、赤魚先づ下手より出づ。

赤魚曲(長唄)

ぱくり。ぱつくり。つういつい。海帶へおじやらせ。海蘊へせ。ひよつくり。ぱつくり。

と此の唄に伴れて赤魚群る魚に絡みて好笑みの振。

曲

おもしろや。

と宜しく收了る。よきころに鱸(男)鱚(女)上手より出づ。三人とも頭に當の魚の形ちたる帽を戴き、着

附の色も當の魚の色を用ふ。

赤魚曲

てもさつても素敵な玉ものを何時靡き藻と垂藻の離れ堅海藻か見る目もあるを手に手をとつさか甘海苔中はむかつく海苔ではないかいな。

と調戯模様にて鰐にかゝる。

鰐曲

今は浮海松和布の昔悔みこそすれ。餘所目ぢやてゝも餘り海藻根が利かぬぞえ。

赤魚曲

それ〳〵。それが曲者よ。口でけなして心ですくも。深藻どころであろぞいな。うらやまし。

と宜しくある。此のうち海底(奈落)にて洋々たる音樂(雅樂)聞え例の魚ども紛々然として八方より群り游ぎ入ると見るうちに、又ぱつと八方へ游ぎ去る。鱸は二人が間へ割つて入りて

鱸曲

開いた〳〵。そこ退かせ。殿さ媛さの御出御ぢや。吾等は暫し藻がくれ

て。

と三人宜しく縺れて入る。

第二段

浦島　乙姫　女童二人

左右するうちに嘲嘵たる音樂(雅樂)に伴れて徐ろに龍宮城の正殿を迫上ぐる。半球形(圓頂)式とも謂ふべき樓臺全體が正圓形にて、屋根の或部の他は總て稜立ちたる趣なき構造例の山門式の殿堂に似たるよりは寧ろ泰西の伽藍などに似たり。柱は皆珊瑚なり。コリンス式に擬ふ柱の飾は玳瑁、瑪瑙、硨磲

其の他種々の貝を用ひて物したり。

周壁の處々には窓に似たる口ありて、そこに彩絲にて美しき藻草を涼しげに縫取り、更に金絲、銀絲をも加へて美しき貝の色々をも縫取りたる薄き織物の御戸帳を垂れてあり。浪はその窓を自在に行通ふ積にて、例の魚ども游ぎ入り、又游ぎ出づ。殿の正面にも同じ樣の御戸帳を備へたれど、皆捲げ又は絞りてあり。層樓は始終帳を下したるまゝなり、されど例の魚どもは往來すること屢〻なり。

尙此の圓殿を繞りて築かれたる廻廊やうのものは、悉皆美しき白き貝にて數詰め、珊瑚を臺にして貝の粧飾を施したる欄干を打廻らし、さて其の正面は略九尺ほどを開いて、こゝに同じく白き貝類にて疊みあげたる三段の幅廣き階子を取附けてあり。

さてまた此の圓殿を迫り上ぐると同時にあちこち

に生ひ出たる草樹どもは流るゝ如く左右へ開いて漂ひ去り、殿の周圍濶然となる。兼ねて正面奥の海面へも圓殿と同じ式に成れるらしき幾多の樓臺及び其の間々を聯絡はしたる綿連たる廻廊を迫上ぐる。金碧熒煌、光彩陸離として、幽々窺々たる靈境の光景。

此の圓殿の中央、やゝ上手寄に、浦島曲彔やうの物に倚りて坐し、少しく俯きて、輕く額に左手を加へ、悵然として物思はしげなり。頭には小やかなる金龍の飾附きたる寶冠を戴き、服は長袖なれども其の形は東洋在來のに似ずして此の圖の如く斜形なり。裳裾も地を拂ふほどに長し。曲彔は珊瑚臺にして七寶を鏤めたり。

浦島の傍ら、只少し奥へ下りて下手に、乙姫立ちて、右手を輕く浦島の曲彔に觸れ、只心ばかり頭を傾けて浦島が貌を差窺きたる。髪は角髪擬ひに束ねて飾櫛などの在るべき邊に同じく小やかなる金龍をいたゞき、尙珠玉金銀を繁からぬまでに髪飾にも、腕、胸、手首等の飾にも用ひたり。（衣裳の仕立、染色模様等好みあり、色及び模様は前幕と突かぬやう、且つ總じて能衣裳を參酌して、沈みたる色を用ふべし。）姫の坐すべき曲彔は殿の下手、奥の方の窓際に据ゑてあり。魚形の帽を戴ける可憐なる女童二人、その邊に侍す、これも低き小き曲彔やうのものに坐せり。

迫りとまると、樂聲嬝々として微かになる。浦島貌をあげ、姿を整へて、先づ座に着きたまへと姫へ科介。姫浦島が傍を離るゝ。女童走り進みて曲彔をまるらする。姫は中央下手寄浦島よりは二歩ほど奥へ

下りて坐ふ。

乙姫白

いやとよ。さなのたまはせそ。きのふけふと日を重ねて、御面持のいよゝ例ならず見えたまふはいかに。常樂の此の臺には、只一つの煩ひの他は、かりにも入來んよすがなし。さては人間の世を戀ひ慕ひたまふにこそ。

と宜しく思入ありて言ふ。此の間浦島思入あり。

浦白

察られつる上からは、何をか韜み申すべき。我れ御身と契りを結び、此の寶闕に住してより、既に三歳を經つれども、歡樂長へに圓かにして雜

念いさゝめにも動きしことなし。朝には金丹、石髓を服し、夕には玉酒、瓊漿を味ふ。相の花は凋まずして、身は宛然の仙となり、心の悅びは現なれども、我が境涯は神に似たり。厭ひ棄てぬる人の世をば、夢にも思ひいださゞりしが、御身と同心一體の、其の悅樂の尊さを、深くも悟りし

曲白

其の頃より

と慘愴たる思入ありて、遙かに天の一方を望み

浦曲（ウタヒ）

月晴れ渡る夜々に不思議や千尋と隔てたる八千重の波の彼方より微かに

聞ゆる海人の歌。

（一中）

轟く浪に咽びては怨咽として怨むが
如く遠のく波を潛りては悠々として
憧狂るゝ凄慘たる肉の聲。斷えぐ〳〵
なりや腸も。

と、よきころに悵然と立上りて振になる。

（同前）

今ぞ始めて哀れさを身に知る雨の故
山邊頻りに戀し近親人。いや懷しき
父母を忍ぶに餘る思ひなり。

と思慕纏綿の振宜しくありて收了り

浦白

いかで我れ一人のみ此の歡樂を貪らんや。せめても父母を伴ひ來ん。暫し暇をたびたまへ。

と科ありて言ふ。此の間目を閉ぎ默然たりし乙姫徐かに目を開きて

姫白

理も無きことを仰せられさふらふものかな。
そも〳〵遠く塵の世を離れませばこそ此の淨樂。かりにも浮世の土を踏み塵を肌に觸れたまはゞ、あれ、あの碧琉璃の草樹も忽ち枯れ、水晶、白銀の花どもゝ立地に凋み、此の寶闕も、仙閣も、消えて水泡と跡無からん。君さへも得歸りた

まふまじきぞ。などて親族人をや。

と優しく柔かに、いと〳〵慚ましげなる思入ありて

いふ。

浦白

いや〳〵。去年花着けし枝は今年も亦た咲き

候ふぞかし。曾て經ぬる途を再び踏むことの

何どて難き。さて又我が親戚は、よしや將て來

んこと

曲白

能はずとも

浦曲(長唄)

我れ立歸り讃頌に淨樂界の眞相を綴

りて琴に奏でなば有繋臭穢に馴れし

身の垢も膩も滌はれて卽てぞ澄まん

秋の月。

と次第に熱し、感募りて立ちて舞ふ。それを止むる

やうにして乙姫も立上り

姫曲(長唄)

澄むとも哀れ叢雲の又立掩ふ迷ひと

て君さへも曇らんを曇れる耳に君の

歌君の琴の音やは聽かん。何事も只

專念にあるべけれ。左右に追はゞ小

魚だに只藻がくれて效ぞなき。

と徐ろに、氣高く美しく浦島に絡みて謡め模樣の振

ありて、二人ともに座に戻る。

姫白

よしなき御念をな催させたまひそとよ。あれ
あれ。君を慰めまゐらせんとて、あしこへ魚ど
もの許多舞ひいで候ふをば見そなはせや。

と宜しく科。浦島も思入ありて起つ。姫も起上る。女童二人ながら走り進みて曲条を稍殿の奥へ移す。

第三段

浦島　乙姫　女童二人

舞班大勢　尉　姥

此のうち又新に音樂(雅樂)嘹喨として起り、下の朗詠がゝりの曲に伴れて雌雄の鱗族、男女壯幼、およそ五十六頭舞ひつゝ出で來る。服色は濃き色、淡き色取り交ぜ、二人づつ一色にて、都てにては虹の七彩などを思ひ起さしむるやうなる舞衣裳を着たり。いづれも當の魚の色に因める色形したり。さて上手より、又下手より同じさまに袂を連れて逶迤として舞ひ出で、正面に來りて入れかはり、更に舞班を整へて蹁躚として舞ひ始む。

曲

三壷雲浮七萬里之程分浪。五城霞峙十二樓之構挿天。

此の朗詠終り、器樂のみとなれるころ、其の器樂の旋律に伴れて舞班一同二人並びに列を整へて緩く上

手より下手へ練つて、圓殿の背へ舞ひながら廻り入る。後列未だ下手に在るに前列は早く既に上手へ廻り出來る。やがて第二の朗詠がゝりに入る。

曲

謬入仙家雖爲半日之客恐歸舊里纔逢七世之孫。

此の朗詠に伴れて舞班二たび圓殿の背を一周し、三たび器樂に伴れて將に上手より練り出んとする時しもあれ、迢かに天の一方に當つて、遠く〳〵、殆ど何事なる歌ふとも聞分けがたきほど微かに哀絶凄絶なる欽乃の聲聞え來る。舞班は少しく歩調を緩め、器樂に隨うて下手へ舞ひ進む。欽乃の漸く近く、漸く著るくなり來るに伴れて、雅樂の調は彌〻緩く彌〻低く、舞班の列いつしかに一重並びとなり、華かなる

濃き色の服着たる舞手は著るく減じ、歩武將た次第に力なく、且つ次第に緩かになりゆく。浦島怪しみて耳を欹つる思入。乙姫は端然たり。已にして舞班の前列は三たび圓殿の背に廻り入る。欽乃遠く、されど此回は頗る明かに聞え來る。

カヒワケ

親は子と言うて尋ねもすれど親を尋ぬる子は稀れな。

此の歌の半に舞班は四たび上手へ廻り出で來る。但し其の服色は更に淡しきもの計りとなり、後の方なるは殆ど白色に近く、且つ其の歩調は更に一段緩く、人數も更に一段疎らとなり、手振將た更に一段生氣を失ひ、さながら最愛の人を失ひたる葬儀の行列などの如く、見るからに痛ましげなり。已にして四

たび下手へ舞ひ進む。これよりさき四面次第に薄暗くなり、涙は騒がざれど海かすかに轟き、怪光時々に電の如く閃き、舞班の最終列に忽然として加はれる一個の人影あり。白き衣裳を裳裾のあたり朦朧と着下したる白髪の一老女、恐然げに頭を垂れて両袖にて面を掩ひ、舞班の最後の列に隨ひて悄然として行く。浦島愕然と駭きて色を失し、覺えず曲彔を離れて起ち、圓殿の背へ廻り去る其の後影を見送るうち、前の欽乃は斷れ、疎らなる舞班の最前列は五たび上手より練り出來る。時に怪しき響は歇みて、暗淡たりし舞臺また少しく明るくなる。浦島は怪夢を見たりし人などの如く、恍惚として前後左右を顧盼る。忽ちにして第二の欽乃聞え來る。

オヒワケ

親は程經りや不具な子なりや……

此の歌と共に殆ど白色に近き色の服のみを着けたる疎らなる舞班は悄々然として緩かに下手へ練り行く。四面また昏くなり、海底といろき電ひらめく。浦島慄然として、以前の老女や隨ひ來ると目を欹てて目迎す。欽乃突として中絶し、舞班もまた突として途切れつゞき來るものなし。浦島は呆然として舞班の最終列が將に圓殿の背に隱れ去らんとするを見送る。その途端突如として

オヒワケ

……人でなしなりや尙更に。

と前の欽乃の殘りの句骨に沁み入るが如く聞え來ると同時に、突如として以前の老女、今浦島が階段の方へ歩を進めて舞班を見送れる目前へ影の如く幻の如く、其の悄然たる背影を現す。浦島の之れに目を注ぐ其の刹那に忽然として現るゝ一個の白頭翁、

衰癯極まりながら尙ほ有繋に氣高きこと鶴の屍骸の如く、是れ亦た白衣白裳龍鍾と頭を垂れ手を拱き、老女の背に附添ひて、愴然として行く。浦島おぼえず聲を放つて絶叫す。翁も老女も、身を翻して浦島が方を見返る。老女は階段の方へ駈寄らんとする、翁は强ひて之れを引留む。此の刹那に於ける二人の顏色、態度科介宛然として序幕第三段末のと相同じ。老女は限りなきの思慕と慈愛と哀傷と苦痛とを、翁は悔恨と惻隱と哀傷と就中今尙ほ胸中に鬪へる一種言ふべからざる煩悶の爲に强ひて愛情を抛たんとする斷腸の苦痛とを忍ぶものゝ如し。

浦島は殆ど我れを忘れて階段の端まで轉ぶが如く走り進みて

浦白

母御前か。　父御前もか……

と叫びもあへず覺えず蹌き、けしとびて忽ち階下へ轉び落つ。翁媼忽焉として消えて跡なし。舞班亦た駭きて四散し、樂も歌も悉く歇む。舞臺いつしか明るくなり、怪しき響も止み、怪しき光も消ゆ。乙姫は侍女女童と共に階を下り、左右前後群り寄りて浦島を介抱し、霜々として殿上へ扶け入るゝと同時に圓殿の帳悉く下る。

既にして清く寂しく哀れなる雅樂（器樂ばかり）啾々として起る。諫むるが如く、止むるが如く、憐むが如く、愁ふるが如し。かくあること霎時にして圓殿は遠見の樓臺、廻廊と共に徐かに自ら迫下る。

第四段

浦島　乙姫　女童二人

樂聲漸く絶えなんとし、圓殿の屋根將に沒し去らんとす。第三の欸乃鳴々として聞え來る。

オヒヲケ

いとし可愛子に旅させ親よ。ういも辛苦いも旅で知る。

此の歌の切れんとすると同時に、以前の海樹海草ども又左右より漂ひ入りて滿目蒼然、屋根悉く沒し去る。途端に其の屋根の中央より、さながら浮び出づ

るやうに、浦島は立身、姫は跪づき、女童(二人)は姫の後へに侍して迫上る。

舞臺は元の通り一面の平舞臺、只の蒼々漫々たる千尋の海の底となる。浦島は序幕の服裝となり、肩には釣竿を荷ひたり。乙姫は輕く浦島の袂を控へ、女童は玉匣を捧げて侍る。

迫り止ると、浦島輕く袂を拂ひ前へ進む。姫も徐かに立ちて隨ふ。

浦白

別れては又逢はんこと難かるべしとや。我が心迷ひ傷んで、さながら二段にも裂けなんとす。されども故郷を慕ふ心は、今は先刻にも百倍せり。いかでかは

曲白

止まることを得ん。

曲(一中)

君が切なる眞情を嬉しむからに最ど
尙ほ近親が面偲ばれて。

と輕く姫に絡みて

浦白

まげて一たび故郷へ立歸ることを許したまへ。

姫は黯然たりし面をあげ

姫曲(長唄)

是非もなや。今更に留めんことも中
中に長き別れとなるとても蓬萊の契

り永久に我が影忘れたまふなよ。
げに恩愛は人の世を維ぐ玉の緒。よ
ればうみ合はねばくるし。かにかく
に結ぼれ解けぬ亂れ絲そも何時の日
か絶つべき。

と嗟嘆く思入あり。徐かに浦島に絡みて振あり。始終人間の情に脆きを憐み思ふ靈物の氣高さを想像せしむるに足る風趣あるべし。やがて思ひ返したる體にて、浦島に離れ

姫曲

大方は想ひやらるゝ其の折の縺れ解

さん玉くしげ。

と女童へ科。女童玉匣を浦島に捧ぐること。

姫白

此の匣の裡にこそ我が影は籠りたれ。御情渝らずば、あはれ、此の匣をな開きたまひそ、只身に添へて持ちたまへ。ゆめ〳〵開きたまふなよ。

曲

開かずば君の御齢八千代経て又花咲かん玉椿。つら〳〵椿色かへぬ契りを忘れたまふなよ。

浦島玉匣を押戴きて

浦曲(長唄)

かたじけなしや形見ぐさ。蓬莱を永久に思ひ出の君をば焉で忘るべき。

と徐ろに纏綿して舞ふ。やゝ長き合の手に合せて女童も絡み、神と人との別離の情を微示する高尚なる振あり。とゞ

浦曲

我妹子と言ふも畏き神媛に愛しまる我れ。

姫曲

別れても又逢はん

浦曲

といふ此の別れ。

姫曲　嬉しきか。そも

浦曲　悲しとも

姫曲　え分かぬこそは妙にして。

と宜しくありて

浦曲　名殘は盡きじ。さらばなり。うつくし人よ。また歸り來ん。

と三人宜しくありて、浦島は同じ位置に在りて上手へ、姫と女童とは次第に奥へ、互ひに見返り〳〵舞ひ隔たる。此のうち舞臺は次第に薄暗くなりて、涙の

音漸く高く轟き來り、例の魚ども四方より紛々然として游ぎ入り、浦島と姫主從との中を隔つ。青き靈しき光又時々に閃きて涙を照らす。さて姫と女童とは段々遠くなりて、姫は女童ほどに、女童は偶人ほどに小くなると同時に、正面奥の方へ龍宮城の外廓らしき遠景模糊として浮ぶ。

浦曲　さらばぞ。さらば。いざ然らば。

と此の曲一ばいに舞臺彌〻朦朧となりて、龍宮も姫も女童も見えずなり、涙の音のみ蓼々と響き垂幕徐ろに下る。

詰之幕

前　網野神社境内
後　澄の江の浦

曲

中之幕より詰之幕の間は音樂にて繋ぐ。初めは只
蓼々たる涙の音。やがて際立たぬやうに、いつとな
く西洋器樂を加へて名家の作に係る海の曲を奏し、
かくて次第に陽氣なる洋式器樂に移り、最後に半西
洋式、半日本式とも謂ふべき陽旋律に變じ、これには
三絃をも加へ、やがて幕のうちにて左の唄を歌ひ、舞
踏の足音をも聞かす。

曲

忍ぶ夜毎に六の苦がそろ。雨に霰に

露に芝垣。犬の仇吠月は尙ほ。ナヨ
月は尙ほ。

此の唄の斷れぬうちに幕をあくる。

第一段

村人甲　同乙　同丙
其の他大勢

舞臺は一面の平舞臺。處は丹後の國竹野郡綱野村綱野神社の境内。時は天長二年春三月十五日、夜半過。近村一圓の男女、結婚したると結婚せざるとの

別なく、四十歳以下なるは擧りて、幼きも幾人か、白髮の老婆も只ひとりは交りて、けふを晴れと着飾り、群れつどひ、社日の夜を徹夜に宴みて、遊び戯れ、歌ひ舞へり。

正面中央には三抱もあるべき山櫻の老樹、爛漫として花の咲亂れたる枝は四方八面に廣り、彌生半ばの朧月に照らされ、折々駘蕩たる春風に搖曳き靡く景、さながら淡紅の八百重雲が大地近く降來て杜の頭に漂へるかとも見え、さなくば巨大なる天然の花天蓋かとも見えたり。

此の老櫻樹の周邊には方幾十間もあるべく見渡さゝ瀾然としたる芝生。又其の上手、下手、正面奥共に、處々に常磐木に交りて尙幾株かの櫻木。蒼穹は花の枝にて殆ど見えぬばかりなれど、下手奥へ斜に一帶花の洞の如く開いたる部面は阪口にして、こゝより人々往來す、又こゝより

奥の方遙かに日本海の遠見。黒みたる白帆の影なども折々〳〵微見え、海面蒼茫と煙り、十五日の朧月はや西天に傾きたり。されど花の色いと鮮かなれば、あたり曙のやうに微明と明るし。

老櫻樹よりは幾歩か奥へ退りて、やゝ上手に、古風なる、自然石をそのまゝに組上げたるかとも見ゆる巨大なる石の華表。その華表越しに上手に、石の磴櫻花の間に隱見し、それより次第に高くなりゆく勾配のこゝろ、樹木參差として重疊し、亭々として空を摩する老杉古檜の間、蒸すが如き花の雲の斷れ間に如何にも神さびたる神社の屋背。そのうしろ、近き山遠き山、いづれも花の雲、綠の木々の間に隱約たり。幕あくと、男女二人づゝ手をとりあひ、およそ五組ほど、下の曲に伴れて老櫻樹を周りて舞踏す。（曲は西洋樂に擬ふ陽旋律にして、舞踏にも何となく西洋舞

踏の面影あり）。舞踏者の他は、櫻の根がたに、芝生に、不行儀に休らひ、酒飲むもあり、遊び戯るゝもあり。

曲

いつの何時見そめてそめて我れが身
は只磯邊の千鳥。啼かぬ間もなや君
ゆゑに。ナヨ君ゆゑに。

曲

面白いぞや今咲く花は。蝶も來て舞
ふ小鳥も來啼く。後の散りばは知ら
ねども。ナヨ知らねども。

曲

飲みやれ歌やれ先の世あ闇よ。春は

二度無い笑ふ時や稀れぞ。今が中ば
の花盛り。ナヨ花ざかり。

舞踏三回にして收了ると音頭取らしき生醉の男(三十以上)中央よきところに定りて

甲白

ハヽヽヽ。さて〳〵面白いことであつたぞ。
先づ休ましめ。休ましめ。

と、これにて一同思ひ〳〵に或は木の根、捨石に腰をかけ、或は芝生へ横になる。

甲白

いや、なう〳〵。例年のことではあれど、今春のやうな樂しい祖神祭はおりない。去年の豐年

といひ、ことしの大漁といひ、此のやうな目出たいことは無からうによつて、徹夜して舞ひ歌ふことでおりやるが、只編みつれて舞ふばかりでも面白うない。何か奇特な案じは無いかぢやまでい。

同じく稍や酒に醉ひたる三十ばかりの男乙

乙白

はてさて、よいところへ心附かしやれた。いかさま、同じことでは面白うない。さて何が面白かろの。

大勢一どに首を傾ける。

大勢白

何が好うあろの。

乙白　かうつと。

大勢白　かうつと。

甲白　や。思ひついた。かうもあろか。

大勢白　はて、どうもおりやる。

甲白　されば、先づ、かうでおりやる。昔から此の祭は男と女と編みつれて舞ふが恒例であるによつて、既に古へ人の歌にも

と勿體ぶることありて

甲白　行き集ひ、嬥ふ嬥ひに、

曲白　他妻に

曲（清元）

うらも交らん。うらがのに他も物い

へ。此の山の祖神さあも今日のみは

見ても見ぬふり。粋ぢやまで。

と調戯模様の振ありて收了る。

大勢白　やんや〳〵。

甲白　するからに、今宵の祭に立交らぬと言ふことは

有るまいことでおりやるに、皆もよう知らるゝ濱詰の郎子と間人の郎女とのみは、來る〳〵と言うて只今までも面見せをせぬ。何がさて、此の中一つになつたばかりなれば、物耻をするのでがなあらう。何と、あの初々しい今夫婦に、早う來なんだ償ぢやと言うて、馴初の物語をさせたらば、如何あらうぞ。

大勢白　これは一段と面白からう。

乙白　去たが、只物語をせい、物語をせいと言うても、定めし羞んでゐて、埒があくまいによつて、來と見

たらば、囃子物をして、歌へ舞へ、舞へ歌へと責めうでは無いか。

甲白　これは又一段の案じぢや。早う其の準備をせしめ。

乙白　なか〳〵。早う其の準備をせう。

此のうち二三人阪口より下手を見下すことあり。

丙白　や。左右いふうちに、あれ、あしこへ、其の今夫婦がわせたさうな。

甲白　なに。わせた。

乙白　そしたら、早う呼ばはしめ。

丙白　さらば呼ばはらう。

と阪口より下手を見下し

丙白　ほういく。

第二段

村人甲、乙、丙　濱詰の郎子
間人の郎女　村童數人
其の他

此のうち、前の舞踏の旋律（但し器樂ばかり）に伴れて、阪口より濱詰の郎子先に間人の郎女附添ひて登り來る。郎子は齡二十一二、郎女は十六ばかり。二人ながら容顏、風丰衆に勝れ、とりわけ世馴れぬうちに天眞流露の美しさ見ゆる取なし。やゝ人に重んぜらるゝ分際の男女らしく、服裝も鄙ながら都びたり。器樂歇むと皆々二人を迎へて

大勢白　やんやく。

と囃す。二人は無言にて皆々に會釋する。甲は進み出で

甲白　いや、なうく。足下達の來ようが遲いによつて皆が甚うい腹立でおりやる。償ひをせねば

なるまいぞよ。

耶子白　これはまた迷惑なことでおりやる。　去たが遅う參つた不祥なれば、われらに似合うたことならば、何なりとおつしやりませい。

甲白　外でもない、足下達の馴初の物語が聞きたい。

耶女白　はれま。　戯言を言はします。

耶子白　そのやうなことは、何卒赦させられて下されい。

乙白　物語をさしやらずば、歌なりと歌はしませい。

耶子白　それは一段と迷惑でおりやる。

丙白　去たら舞はしませい。

耶子白　それは尙ほ迷惑な。

乙白　いや〳〵。　是非に歌はしめ。

耶女白　すればと言うて。

丙白　さらば舞はしめ。

耶子、耶女白　さ、それは。

と、これにて甲は左右へ目くばせすることあり。

甲白

さて〳〵、情剛な人たちでおりやる。此の上は、皆が寄りたかりて囃したて、何かさしやるまでは止むることでは無いぞ。それ。囃さしめ。

一、二、三。　一、二、三。

と、これより躁急なる旋律の西洋器樂に伴れて、醉ひたる甲乙音頭取となり、他の者も交りて、櫻の枝などを持つものも有りて、神樂囃子樣の手振にて、逃げまはる二人を中に取りこめ、踊り廻ること二三回。と ど二人は手もて四方の人々を制し

耶女白

まあ〳〵、待つてくれさしませ。

耶子白

此の上は是非がない。浮いたる戀で無い證明に、日來思うてゐるまゝを

耶女曲白

すれば此處にて

耶子曲白

語らうず。

と宜しく介。大勢頷きあうて退る。

耶子曲(清元)

誰が蒔き置きて戀草の人の心に萠えそめし。春ともなれば我れ知らぬ間に野邊に御園に若草の初花匂ふ染ご

ろも。袂に餘る歎ちぐさ。

耶女曲（清元）

色も香りもえならねど實は何を戀ひ
ぐさと問へど音なき皷草。

二人曲

やがて心づくしや命をも棄てゝ世に
菫草彌や眞情の深見草。なに如かめ
やも。

耶子曲

永久の眞理を知る草を何處の誰れが
戯れ草やれ浮草よ色草と仇口々に謗

りぐさ。穢まれては我れからも汚れ
がちなる草の床。

二人曲

此の花の香に牽かれ來て愛づる千種
の花の色。

と二人纏綿して嫻雅優婉なる振ありて收了る。

皆々白

やんや〳〵。

甲白

さて〳〵、興がることであつた。まづ一つ飲ま
しめ。

と、これにて若き女どもに只ひとり白髪の腰の曲り

たる老女も交りて、二人へ酒盃を勸むることなどあり。よき頃に下手(奈落)にて村の童らの叫く聲々聞ゆる。やがて村の童ら三四人阪口より馳登り來る。

童甲白　今あしこへ、知らぬ國の人のやうな、けぶな和郎が來るぞや。

童乙白　着る物も破れて、氣ちがひのやうぢや。

そのうちの一人阪下を見下し

童丙白　あれ〳〵。こちへ來るわ。

皆々の方へ向ひ

童丙白　皆も來て見さいやい。

これにて大人どもゝ幾たりか阪口へ集る。

童甲白　そらこそ腹を立てた。

童乙白　釣竿を振上げたわ。

童丙白　早う逃い。早う逃い。

童ら上手へ逃ぐる。大人どもゝ左右へ開くと、下の曲に伴れて、よき頃に浦島いづる。

第三段

浦島　村人甲、乙、丙　郎子　郎女

村媼　村女　村童　其の他

浦島は序幕の扮裝のまゝながら、衣裳ところ〴〵綻びて、下着は上着の綻び目より露れたり。(但し斯くして下着の金襴が上着のやゝ淡しき染色と照りあふやうに物するなり。)頭髮も元結ちぎれ、鬢の毛美しく紊れて肩に懸り、上髭も髯も美しく生ひ延びて蒼白なる顏色と照りあへり。左手には玉匣を抱へ、右手には折れたる釣竿を携へたり。阪口を登りつゝも左右を訝しげに夢心地にて打詠むることあり。

浦曲(長唄)

山ざくら誰が何時植ゑて花の雲。畫かと見れば夜半にして夢かと見れど夢ならぬ。あら。おぼつかな。蓬萊

山に在りし三歲歟歸り來し今歟いづれか夢現分け惑はるゝ人の山。など知る貌を見ぬやらん。

と宜しくありて正面中央に定るまでの間、群る男女氣味わるげに立離れて取卷き、目引き袖引きして笑ふもあり眉を顰むるもあり、さすがに賑かなりし春の山暫し秋さびて森閑たり。浦島左右を顧りて思入あり。

浦白

なう〳〵。そこなる里人たちに物問ひまゐらせうずるぞ。浦島の尉が宿は何處許にて候ひつるぞや。

甲白　なに。浦島が尉とや。聞いたることもなし。

乙白　その尉とやらは近う爰許に移らしやれた人か。

浦白　いや〳〵。曾祖父が世よりも古く、此の里に住馴れておりやる。

甲は左右を見返り

甲白　足下達は聞いたることがあるか。

丙白　聞いたることもなし。

大勢聲を揃へて

大勢白　聞いたることもなし。

浦島小首をかたぶけ

浦白　おみたちは近う爰許に移らしましたか。

甲白　はれ。むざとしたことをいはるゝ。曾祖父の世よりも古く、爰許に住馴れておりやるを。

浦白　はれ。足下こそむざとした。浦島の尉を知らいで曾祖父の世よりも古く……はゝゝゝ。浦島の尉こそは曾祖父の世よりも古く……

甲白　いや〳〵。我等の父ぢや者こそは……

甲一寸氣込むを丙止めて

丙白　なう〳〵。言葉論するは益ないことでおりやる。その男は氣ちがひさうなに。それ〳〵。子たちよ。女たちよ。うかとして怪我ばしさしますな。

これにて女子供立騒ぐ。浦島けしきばみて

浦白　なに。それがしを氣ちがひとや。

丙白　えい。何を腹を立つることがあるもので。まづ其の姿を見さしめ。

浦島初めて我が姿に心附きし思入。

浦白　やゝ。此の姿は。

童甲白　その釣竿を見い。

浦白　やゝ。いつの間に折れたるか。

此の時大勢聲を揃へて

大勢白　それ〳〵。その髪を。その髭を。

浦島駭きておのが頭を搜り、鬚髯を撫で、袖を見、裾を見、竿を檢し、玉匣を詠め、驚き呆るゝ科介いろ〳〵ありて

浦白　やゝゝゝゝゝ。

驚きて其處に跪づくこと。大勢聲を揃へて笑ふ。

大勢白

はゝゝゝ。はゝゝゝ。

童白

童ら手を拍ち踊りまはりて囃す。

氣ちがひよ〳〵。のさやい〳〵。

女供白

女供は有繋に氣の毒がる。

笑止や〳〵。

浦島は尙ほ夢を見る心地にて皆々に向ひ

浦白

さらば此の夥しい人々のうちに只ひとりだに

曲白

尉をも姥をも

と思入ありて

浦曲

浦島とゆふ潮波や寄邊なき我が身の

上の訝しや。

と立上りて怪しみ訝る模樣の振ある。童ら之れに絡みて嘲弄する模樣の振あり。とゞ浦島は童らに突倒されて蹌踉倒るゝ。童ら囃す。

童白

のさやい〳〵。

大勢笑ふ。

大勢白

はゝゝゝ。

女供白

いとほしや〳〵。

此の時白髪の老女腰を叩き〳〵浦島の傍へ進む。

老女白

いや、なう〳〵。たんだ今やう〳〵のことで思ひだいたことがおりやる。浦島とやらがことは妾幼い折に祖母ぢや者から聞いたことがおりやる。

浦白

や。聞かしましたとか。さても〳〵耳よりな。早う語らしませ。聞かしてくれさしませい。

老女白

何と。聞かしますか。

浦白

なか〳〵。

老女白

さらば語らう。

と思入。下の曲に伴れて、よきほどに立上る。

老女曲（常磐津）

婆が目は霞めるからに水の江の里ち
ふとこに其の往時とつと昔に澄の江
の

と、これにて右に丙の男を左に若き女一人を招き、下の曲のうち、男を浦島に、女を少女に擬へて絡まする ことあり。

老女曲

浦の島子が鰹魚釣り鯛釣り飄兮七日

まで家にや戻らず幻の怪な女子と乳繰りあうて。
親と爭ひ激論みあひ後の歎きも白波分けて漕いで去にやびつくり。親たちや哭くやら叫くやら。
こけて轉んで足摺しても復と歸らぬ世をうらしまの子を戀ひ死の物語り。
と宜しくありて收了る。此の間浦島は斷腸の悲みに得堪へぬ思入。

甲白　去て〳〵、それは何時頃の事ぢや。

老女白　さればいの。祖母ぢやが語られた折が、かうであつたによつてと……おゝ、さうぢや。今より凡そ三百年。
浦島更に愕き呆れて

浦白　なに。當時より今日までに、三百年を經たりと

や。

老女白　なか〳〵。

浦白　やゝゝゝゝゝ。
と空な見つめ驚く介。童ら其の貌を見て囃す。

童白
氣ちがひよ〳〵。

浦白
さては只ひとりの由縁の者だに、此の世には無いかぢやまでい。

此の時までは老櫻樹の根がたに退きて始終の問答を聽き默然たりし耶子と耶女、笑止氣の思入ありて進みいで

耶子白
いや、なう。そこなるお人。そも〳〵御身は如何なる人にておはするぞ。

耶女白
浦島どのとやらに由縁のお人か。

浦島二人を左視右視て

浦白
なう。嬉しうも問うて賜はり候ひつれ。我れこそは其の往昔の浦島が子なる者にて候ふよ。

大勢聲を揃へて
大勢白
なに。浦島が子な者とは。

老女白
すれば、あの、三百年も往昔の

耶子、耶女白
浦島どの〻

皆々白
子なりとか。

浦島左右前後を見返り

浦白　なか〳〵。

甲白　はれ。むざとした。

乙白　はれ。すぢもない。

甲、乙、丙白　はゝゝゝゝゝ。

大勢聲を揃へて

大勢白　はゝゝゝゝゝ。

浦島途に耐へかねて泣き伏す。

丙白　一定くやつは氣ちがひでがな。

童ら聲を揃へ

童白　きちがひよ〳〵。のさやい〳〵。

大人も聲を合せ

大勢白　きちがひよ〳〵。

此の叫び聲いつとなく拍子づき、微かに西洋器樂に合はすること兩三回にして浦島愁然たる貌をあぐる。西洋器樂獸み徐かに曲になる。

浦曲（長唄）

悲しやな。父母の世に亡き魂は代々

を經て呼べども答あら海の
器樂又微かに起る。

童曲(陽旋律)

きちがひよ〳〵。

浦曲

神女が誠へ今ぞ知る。
器樂漸く調子高になる。

童曲

きちがひよ〳〵。

浦曲

童の我れを狂人と嘲るも道理や。幾百歳を經たりとは夢にあらじか。

器樂に伴れて大勢の聲々。

大勢曲(陽旋律)

きちがひよ。

浦曲

現にてあるか。これはそも我が身なるかも。他人か。

童曲

きちがひよ〳〵。

浦曲

誰そ敎へてよ。これなるは他か。我が身か。

大勢曲

きちがひよ。

浦曲

我が身か。他か。

女ども覺えず聲を揃へて(三絃に合せて)

女曲(長唄)

いとほしや。

浦曲

あら。おぼつかなの亂れ心や。

女曲

いとほしや。

童曲

きちがひよ〳〵。

大勢曲

きちがひよ〳〵。

と西洋器樂次第に調子高になりて、「きちがひよ」と「いとほしや」と交代となり、絹交となり、と〻西洋樂は全く三絃の曲調を溺らす。是れより先き浦島は釣竿を放り出し、袖袂を引裂くことなどもあり、只玉匣のみを抱いて、あちこちと狂ふ如く走り廻る。童らを先きに大人も交りて、西洋器樂に伴れて逐ひ廻し、と〻浦島を下手へ追ひ込む。童ら先きに大勢ついて入る。女共ばかり殘る。耶子と耶女とを音頭取にして女ども一同浦島の行きし方を見やりて聲を揃へて曲。(優人自ら謠ふ)。

一同曲(長唄)

あら。いとほしの旅人や。翼は傷み

脚折れて歸る古巣に只一羽。只一羽

耶子曲

音のみ啼く。音のみ啼く友無し千鳥

啼き〳〵て狂ひや死なん物ぐるひ。

いたましや。

一同曲

あとを尾うていで〳〵後を。いざや

救はん尾うて蹤を。

と耶子、郎女は宜しく振ありて二人にて浦島の蹤を尾ひ行くといふ思人皆々へ科介。これにて垂幕を おろし、又浪の音松風の音にて繋ぐ。

第四段

浦島　郎子　郎女　乙姫

やがて幕のうちにて、下の欸乃に浪の音を冠せて、同じ聲にて次第に遠く微かになるやうに、同じ歌を三度歌ふ。

オヒワケ

昔思へば恨めしゆござる。なぜに昔

は今無いか。

三度目の歌ひ切ると垂幕を捲上ぐる。

舞臺は一面の平舞臺序之幕第一段と殆ど同じなり。

中央の磯馴松のみは序之幕のよりも太く、幹は折れ、

枝振も多少變り、根は高く上りて蟠屈れり。月は既

に沈みて黎明の近ける體。下手波打際へ折々涙の打寄することあり。すぐにカケリになる。

浦曲（ウタヒ）

我れや他他や我れとも白雲の何時まで空に迷ふらん。

と此の曲と共に浦島前の場の服裝ながら、上着は殆ど綻び盡して、やゝ綺羅やかなる下着の著るく現れたる扮裝、尙ほ玉匣のみは大切げに搔抱き、一さんに上手より走りて出來り、下手波打際まで行くと涙打寄する、おぼえず逡巡となりて三四歩後ろへ戻りて定り、きつと思入。

曲（長唄）

思ひ知る。父の怒りの言の葉を今こそ思ひ當りたれ。返らぬ昔し悔めども爲んかた涙に七代經て同じ浦邊に漂ふ浮標の何時まで斯くて世を經べき。あぢきなや。

此のうち悔恨惆悵の振宜しくありて、とゞ打伏して泣き、やがて又思ひ返したる思入。

曲

など斯ばかりに我が心弱りもしつる蓬萊邊の神女の契りあるものを。

と起ちて又涙打際へ歩みゆき、神女を慕ふ模樣の振あり。

曲

とは言ひながら何とせん。たづきも
なしや八重の隈。

と海に向ひて絶望の振ありて又坐り、愁の介。こゝへ忙しき合の手に伴れて耶子と耶女蹤を尾うて出づる。

耶女曲(長唄)

あれこそ先の物ぐるひ。

耶子曲(長唄)

いで〳〵慰諭め將てゆかん。

耶女曲

なう。返らぬを徒らに歎きたまふな

旅人よ。

と二人愁然たる浦島の左右に立寄りて慰め和解む る模様の振あり。されども浦島は例の恍然として、それには少しも耳を傾けぬげの思入にて又振。

浦曲(長唄)

山ならば可し其の山の雲井の峯も何
あらん。川ならば可し瀬を速み岩に
碎けん我が心。堪へぬ惱みを嗚呼如
何にして蜃氣樓邊の懷しや。

と又起ちて波打際へ狂ほしげにかけよる。二人あはて〳〵取抑へながら

耶子曲

あら。いたはしや。何ごとも耳には
入らずさふらふよ。

耶女曲

なう。その持たる玉匣は何せん料に
てあるやらん。

と、これにて浦島はじめて我が抱ける玉匣に心附く思入。

浦曲

なに。此の持たる匣をば如何なる料
にするぞとか。今こそ思ひ出したれ。

と懷しげに玉匣を打かへし〳〵打詠めつゝ

浦曲

あら。なつかしの海媛やな。此の匣
だに有つならば逢はんと言ひし日は
何時ならん。逢ふべくば今をこそ。
胸の悶えに我が腸も千斷萬裂の今こ
そ今よ。今ならで何時逢はんといふ。
つれもなや。

と匣を枷に煩悶と戀慕とを現す振ありて

浦曲

面影の宿ると言ひし此の匣。ゆめ開
くなの誓約も今は既何かせん。

と彌〻狂ほしくなりて紐を解くく、既に蓋を取らんとする。二人留めて

二人曲

なう。さる由緒ある箱を粗忽に開き

たまふなとよ。

と、これより稍〻長き合の手。開かんとする、開かすまじと止むる。三絃に西洋器樂を交ふ、折々和し折折和せざる箇所あり。とゞ浦島蓋を取る。白氣朦朧として匣の裡より立昇り、老いたる磯馴松の梢を横ぎりて煙の如く白雲の如くに棚引く。浦島は卒然として眩暈き、高く持上りたる松が根の彼方へ仰むけに倒れ伏す。耶子と耶女とは驚き怪しみて仰ぎ見る。中空高く漂へる白氣のうちに、此の時髣髴として現るゝ海津少女。

乙姫曲(東遊)

野麻騰毘登可是布企阿禮天久毛美駝

禮所企遠理等母與和遠和須良須奈。

耶子と耶女とに對ひて「我が影を忘るな」といふ意の、簡古にして清淡なる、如何にも神々しき科介ありて、白氣と共に暫し中空に漂ひ、やがて見えずなりゆく。二人は只憮然として見送りゐる。やゝありて我に歸りて

耶子、耶女曲(長唄)

ふしぎやな。人かと見えて神かとも

拜まれたまふ面影を

耶子曲(長唄)

何に喩へん。彌生山花爛漫たる萬木

の精霊や凝れる女性神。

耶女曲(長唄)

星に見ざめて八千草の花にや天降る
月少女。

耶子曲

稀有に尊き影向の

二人曲

まぶし。いつくし。ありがたや。
いつの世か忘れん。

と渇仰模様の振宜しくありて、神女の消えゆきし方の空を、二人は踞て伏拜むことあり。これより先松が根に倒れ伏したりし浦島いつとなく影を隠す。

二人此の時心附きて

耶子曲白

あら。忘れたりや。物狂ひの訝しや
影も無し。

と二人立上り諸所を尋ね求めんとする途端、上手にて曲。

浦曲(ウタヒ)

夢は覺めたり長永に。夢は覺めたり長
永に。殘るは骸なるらん。

と此の曲の中ばに、浦島悉く白頭、白鬚髯、痩え皺みたる老翁となり、衣裳も上着の悉く脱落ちたるため自から扮装の一變したるやうになりて徐ろに能がゝりにて舞ひ出づる。

浦曲（長唄）

わが盛り何方行きけん白雪の積るも
可しや老の阪なに來しかたを歎かん。

と高古莊重なる振宜しくありて二人に向ひ

浦曲

なう〳〵。それなる青年よ。我れ或
時は影を追ひ又或時は形のみ老いぼ
れにけり片輪車の足弱車時勢にも七
代おくれし癡愚の我れ。

と慚愧して將に覺悟の觀念に入らんとする模樣の沈痛なる振ある。二人は之れを介抱り慰むる模樣に立添ひて

二人曲

われらも同じ幻の影を不思議に神鏡
の實にも眩き其の面影を神と尊崇み
我が姿日に照らさん友かゞみ。

浦曲

をろの鏡の來しかたを寫すや老の古
かゞみ。

二人曲

よし曇るとも眞光の磨かば竟に眞澄
かゞみ千代を照らさん月の影。

と浦島の老い衰へたるを介抱り、その來しかたを悔い歎くを慰め「われ〳〵介抱しまゐらせん」といふ意

を髣髴かす振よろしくありて、浦島を松が根へいざなひ、そこに憩はしむ。かくて又やゝ長き合の手となる。此の合の手は三絃と西洋器樂との連奏旋律も愉快なる陽旋律なり。耶子と耶女と相纏綿して舞ふ。（ところ〴〵微にパレーの面影あるべし）。すべて前途望み海の如き青年の快活と意氣と天眞爛漫の美とをほのめかす振あるべし。とゝ又長唄がカリに戻ると浦島松が根を離れ

浦曲（長唄）

あら。賴もしの青年やな。蓬萊の相
うつゝ世に見ん折も遠からじ。
うれしさよ。

と高尚典雅なる振ありて收了ると又志ばし合の手。

（半西洋式、半日本式の器樂、三絃と西洋樂器との連奏）。これに伴れて二人は浦島を介抱り幇けて舞ふ。（此の振また半西洋式、半日本式なり）。とゝ又長唄がゝり。

浦曲

見よ〳〵軈て東方に見よ〳〵軈て東
方に豐阪昇る朝日影。闇吹晴れて四
方の山。四方の山

二人曲

朝づく日隈なく照らし洽く惠む。朝
づく日醜き忌まず穢き舍てず。心は
大空餘光は地を

三人曲

離れず永久に。永久に離れず射す日影。あはれ。あはれ。今こそ悟れ現世を忌まで蓬萊に渇仰るゝ忌まで蓬萊に渇仰るゝ私し心無き民ぞ蓬萊移さん現世に。移さん蓬萊いつか此の世に。

耶子、耶女の曲は稍〻純粋なる西洋式の陽旋律に物して西洋樂器を三絃に合すること。最後の三人一しよのは和洋折衷の陽旋律を取りまぜ、三人連舞にて宜しく幕。

此の曲の初より奥の方の空に朝日影の反映する積

大尾

にて一帶の薔薇色を見せ、其の末に近づくに隨うて上手へ近き山、遠き山の模糊たる畫景を繰りいだし、海原の遠見の段々下手へ隱れゆくに連れて、とゞ東山に瞳々たる旭日の差昇り、金光を八方に射出するさまを見すること。

明和三年丈子九月譜求於福岡價五〇四

明治三十七年十一月二日印刷
明治三十七年十一月八日發行
明治三十七年十一月廿五日再版發行
明治三十八年二月廿八日訂正三版發行
明治三十八年三月二十日訂正四版發行

定價金八拾五錢

著者　東京市牛込區大久保余丁町百十二番地　坪内雄藏
發行者　東京市小石川區音羽町四丁目十一番地　荒川信賢
印刷者　東京市京橋區築地三丁目十五番地　野村宗十郎
印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所

著作權
興行權
登錄濟

發行所　東京市牛込區早稲田　早稲田大學出版部

發賣所

博文館

東京市日本橋區本町三丁目

其他

全國各地書林

墨房永樣

明治四十年二月廿二日

東京早稲田

同仁病院次 佐〻